

# 気付かずに「ドクハラ」



## ドクター・ワッシー

### 診察室

### ざっくばらん

#### 何気ない言葉、態度で患者に

一時、テレビは、スポーツ界のパワハラ問題一色だった。加害者とされた人には、共通してパワハラの認識がなかった。が、それが、マスコミにパワハラされるモトになっていた。

そうだ。医療界でも、パワハラ問題は起きやすい。俗に言うドクハラだ。患者さんから見れば、医者というのは、スポーツ界の監督やコーチ以上に絶対的な強者でなかるうか。だから、医者の言うことが正しくても、善意？からのものであっても、問題が起きうる。患者さんを不快にしたり不安にさせたりするものなら、それはドクハラということになる。そして、医者のほうは、意外にも、自分の言葉や態度がドクハラになること

に気付いていなかったりするのである。

例えば、こういうケースはどつだろう。たまたま頭の検査をして、偶然に、脳動脈瘤(コブ)が見つかった。医者が、「今は大丈夫。でも、年を取ると、コブは大きくなるかも。で、先のことは分からない」と言ったとしよう。ま、その通りだろう。が、年を取らない人はいないから、患者さんの不安は増えるだけだ。りっぱなドクハラである。

コブはまだ小さくて、手術をしないで経過をみることにした。タバコを止め、お酒も控えるように言われ、降圧剤も飲んでいいる。ある時、仕事の都合で受診が4、5日遅れた。「きちんと薬を飲まない」と、余計に血圧が高くなる。血圧が高いとコブは破れやすい。くも膜下出血になったらどうする」と脅かされた。これもドクハラだ。

どこかで聞いたような話だ。そうだ。ワッシーの診察室でも、似たような会話が交わされていた。医者は、患者さんに病気の説明をするのが仕事だが、なんと話の下手なことか。「人のふり見てわがふり直せ」だ。でないと、そのうち、患者さんにパワハラされる。

(石黒修三 いしごろクリニッ

ク・脳神経外科専門医、金沢市在住、射水市出身)



イラスト・野畑桃花